魔法少女リリカルなのは　Ｎｉｔｒｏ＋　妄想してみた。

とまと餅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは　Ｎｉｔｒｏ＋　妄想してみた。

【Ｎコード】
Ｎ８０９９Ｌ

【作者名】
とまと餅

【あらすじ】
魔法少女、悪鬼と共に。

魔法少女リリカルなのはシリーズ。
装甲悪鬼村正、斬魔大聖デモンベイン等のニトロプラス作品。
永遠神剣シリーズ。

作者の好きなモノを混ぜ込んでみました。

スラッシュラブコメ異世界冒険ノベル？（誇張表現を過剰に含む）

詳細†項目　随時更新　設定、用語説明　※ネタバレ含む

ネタバレ、注意！！

第5話くらいまでの状況と説明が先行して書いてあるのであえて知りたい人以外は飛ばしてください。

分からない、把握しにくい部分はここで注釈、更新していく予定。

○主人公　比良坂（ひらさか）　鞘吾（しょうご）（オリジナルキャラクター）

元は何処にでもいる一般人。現在ユーフィーとアリアの三人で様

々な世界を旅しながら神剣を捜索する事になった。

過去に上位永遠神剣第二位『森羅』の使い手だったがとある事件で神剣を四つに砕かれ、エターナルとしての力と記憶が失われてしまった。

元の性格はともかく現在は一般人としての感性で生活しており、色々とお年頃な反応を示しながらも困った人を見捨てられないといった主人公気質を備えている。

が、過去の影響か敵対する者や気に入らない者に対する反応は厳しく、容赦の無い一面も持つ

名前に秘密が？　　余談だが、家事万能。　そして巨乳スキー

現在手元にある神剣は黒属性の刀　第六位『村正』　　（参考出典　ＰＣゲーム　装甲悪鬼村正　より）

『森羅』の破片であり、磁力制御という特殊な能力で磁性反発を利用した電磁抜刀（レールガン）や加速行動が可能。

下位神剣でありながら確立した人格を有し、戦いに不慣れな鞘吾を導くお姉さん的存在でもある。

戦闘時は厳しいが日常だと割と甘めなツンデレさん

○ヒロイン　悠久のユーフォリア　・通称ユーフィー　（出典PCゲーム　聖なるかな　より）

主人公を旅に向かわせた張本人。生まれながらのエターナルと稀有な存在であり、心優しい妹系少女。永遠神剣第三位『悠久』の持ち主。

何の因果か、出典元と同じように記憶の一部を失い本来の目的とエターナル時代の鞘吾と出会った過去を忘れてしまった。

鞘吾を「お兄さん」と呼ぶ

作者的には妹より娘にしたい子ナンバーワン。　ユーフィー可愛いよユーフィー。

○ヒロイン？　詠鐘（えいしょう）のアリア　（オリジナルキャラクター）

永遠神剣第八位『詠鐘』の能力によって異なる世界間を自由に移動出来る人物。毒舌キャラでメタ発言が目立つ、その上何を考えているかよく分からない表情を常日頃から浮かべる女の子。見た目はかなり高い水準のクールビューティー。（……とは本人の談）

記憶障害は起こっていないがただの移動手段として同行していた為、ユーフィーが秘密にしていた真の目的を知らされておらず、なし崩

し的に旅へ参加する事になった。

何かにつけて主人公へ毒を吐くがその実態は……？

鞘吾と同じく元エターナルらしい。神剣開放時の名前は第三位『叡象』で、ある程度の時間跳躍も可能。戦闘用ではない。

力を発揮しない理由についてはもっと好感度を高くしないと明かされないんだぜ？

○永遠神剣第二位『森羅』　（オリジナル設定武器）

鞘吾本来の神剣であり旅の目的。上位存在として申し分無い圧倒的なパワーと明確な意識を持つがそれ以上に極めて希少な能力を秘めており、この力を狙って幾度と無く他エターナルに存在を狙われてきた。

形状は捻れた両刃双刃の大剣、四本の剣が絡み合うような姿だったが分割され、行方不明になっている。

判明している欠片は二本。手持ちの『村正』とアーカムシティに隠匿されているであろう赤属性『咆哮』

○ヒロイン？　スバル・ナカジマ　（出典　アニメ　魔法少女リリカルなのはシリーズ　より）

鞘吾達がトラブルで降り立った世界の燃え盛る空港で泣きじゃくっていた女の子。

シリーズ本編と異なり、なのはだけでなく結果的に彼女の命を救った鞘吾にも憧れを抱いてしまい、強くなろうと決意する事になった。

○ヒロイン？　高町なのは　（出典　アニメ　魔法少女リリカルなのはシリーズ　より）

スバルといっしょになって遭難していた鞘悟達を救助しに来た女性。

前者と異なり、見た事も聞いた事も無い魔法体系を使用した鞘悟を危険視しており、再会の際にはあからさまに彼を警戒している。

そう、この小説のなのはさんはツンから始まるのです。　つまり話

が進んでいけば……

○登場人物　ウェスパシアヌス　（出典　ＰＣゲーム　斬魔大聖デモンベイン　より）

プロローグに出てくる敵キャラクター。一見、好々爺風の紳士だが中身は間違いなく真性にして悪徳の魔術師。魔導書「エイボンの書」を所有し、鬼械神「サイクラノーシュ」という巨大ロボットの召還が可能。

ブラックロッジという秘密結社の大幹部で交戦時、鞘吾達に何かを仕掛けたようだが……？

作者的にナイスミドル５本の指に入る名脇役。　じいじ可愛いよじいじ

第０話　劇中†先行　リリカルな魔導師と天を駆ける武者（前書き）

この小説の触りを先行書き。

ここまで進むのはまだまだだなー。

第０話　劇中†先行　リリカルな魔導師と天を駆ける武者

輸送中のレリック奪還作戦。

記念すべき機動六課の初任務は多少のトラブルはあったにせよ、見事対象を確保し、後は帰還を残すのみのはずだった。

しかし、皆が作戦の成功を喜び、一抹の安堵を覚える中でそれは簡単に打ち砕かれた。

作戦領域に突如飛来するは増援のガジェット群。真っ直ぐレリックを目指してこちらの輸送ヘリに追い縋る。数自体はそれほど多く無いがその一団の中に見慣れぬ謎の機体が存在していた。

数は１０機程度で全長は2メートルほど。銀色の装甲に身を包んだそれは鎧武者を彷彿とさせるフォルムで空中を騎航している。同様の形状で他ガジェット同様、量産型だろうと予測されるが、彼らはとてもＡＩ制御とは思えない複雑な機動を描きながらこちらに襲い掛かってくる。

高町なのは、フェイト・テスタロッサ両隊長達が困惑しながらも何とか防衛線を張るが、強力なＡＭＦを搭載しているのか、まったく魔法攻撃が通用しない。徐々に戦いの主導権は相手側に傾き、撤退を視野に入れるべきと提案されるが、俺は部隊の意向に反して戦闘態勢を取った。

「退いてろ二人共。あいつらの相手は俺がやる」

「えっ？」

「ど、どうするつもりなのアニキ！？」

驚くティアナとスバルを他所に、使う場面が無かった相棒に跨ってアクセルを捻る。

理由はどうあれ、活躍の舞台が得られて歓喜する一台のバイク。幸いだったとでも言うように帰還途中だった輸送ヘリ内部に狂気染みたエキゾーストを反響させた。

その正体は俺だけの為に開発された専用のマシンナリーであり、試作型の騎乗用ストレージデバイス『ＧＳＸ－Ｄｅｓｍｏｄｕｓ』、通称『デスモドゥス』だ。

大型バイクをカスタマイズした一品で、漆黒のボディに積層装甲、更に車体前後には牙をイメージしたチタンブレードを装着するという過激な改造を施してある。そのため見た目が恐ろしく凶暴で悪魔の顔に似た姿になっている。

こんなモンスターマシン、子供が見たらまず泣く。……っていうかここ来る前にすでにキャロが泣いてしまったのは内緒だ。

尚も鼓膜を劈く轟音を上げていきり立つ様に苦笑してから半開きになっていたタラップを転げ落ちるように身を投げ出す。

眼前に広がる正体不明の飛行武者の群れ。それを倒す為に俺は聖王教会から密命を帯び、機動六課に配属されたのだから。

「武者の相手は任せておけ。あんたは他の新人どもを守ってやれよ！」

落下からの強風を受けて錐揉み状態に陥りながらも一方的に告げて、高町を前線から逸らす。

このまま戦えば巻き込む恐れもあるし、何より普段、仲の悪いあいつと連携が取れるとも思えない。

「さーて、デスモドゥス？　分かってるな」

気を取り直し、声を掛けると返事の変わりの電子音が鳴って輝く光芒が展開。俺には使えなかった魔法行使の術式が発動する。

『――ウイングロード！』

満を持した声に呼応し、輝く軌跡が薄い帯を映し出し、晴天の空にアーチを描く。スバルとはまた違った深紅の車線が敷かれて道が出来た。

素晴らしい。シャーリーの説明通り、何度やっても出来なかった魔法がサポート一つでがこうも簡単に実行できるのか。

車体がウイングロードに捉えて接地、サスペンションが大きく揺れて着地は成功した。高度数百メートルが醸し出す見晴らしの良さで敵を見据える。

（残る増援は飛行型が残り３０。欠片の武者が８機ってところか）

高町もフェイトも必死に抵抗しているが、従来のＡＭＦに加え、あの武者には特殊な魔法が付加されているはずだ。このまま押し切られるのは時間の問題だろう。

ちと数は多いが、問題だった航空手段を手に入れた今なら俺が一番うまく戦えるはず。

いまだ訝しい表情を浮かべる高町を一瞥した後、ハンドルを思いっきり握り締めて準備万端。

正義の味方とは程遠い笑顔で高らかに叫ぶ。

「さあ、行くぜ。ガラクタども。――塵は塵に、灰は灰にってなあぁぁ！！！」

全力加速（フルスロットル）。

ウィリーのように車体前部が跳ね上がり、フロントホイールとともに悪魔の大顎（アギト）が牙を剥いた。

瞬間で最高速に突入したデスモドゥスは血染めのウイングロードを駆け抜け、進路上のガジェットを容赦なく喰い殺す。

ナノ単位まで磨がれたチタンブレードが装甲を紙切れ同然に切り裂き、突進力によって内部の機械ごと押し潰す。

天空を縦横無尽に駆け巡るその姿は悪鬼か修羅か、それとも殲鬼か。

肉食獣を思わせ、突き立てられていく牙は二台、三台と続けざまに敵機を巻き込んでも勢いはまるで収まらない。まだまだ足りぬと餓鬼のように飽食を繰り返していく。

だが、この横行を危険視したガジェット群はこちらの攻撃が近接手段しかないと判断したのか、一定の距離を取りつつ、遠距離戦に傾向した。

確かに彼らの予測は正しい。俺には魔法の才能はまったく存在せず、あらゆる訓練を経ても改善の兆しは無かった。

「でもな……。やりようは幾らでもあるんだぜ？」

時に鈍角、時に鋭角に複雑な軌道を描くウイングロードでデスモドゥス本体にマウントされていた折り畳み式の武器を組み上げる。

それは三折れの柄を持つ長大な槍、白というよりは銀の輝きを持つパルチザンだ。先端に刺々しい刃を幾重にも携える姿は殺意と恐怖の象徴のようでもある。

組み上がったそれを片手に担ぎ、大きく振りかぶってから狙いをつける。――――目標は敵ガジェット交錯地点。

念じるとともに膨れ上がる魔力の奔流は槍にどんどんと収束していき、やがて術式を唱えてもいないのに魔方陣が展開する。

俺は魔法を使えない。だが、デスモドゥス同様にあらかじめ魔法を詰め込んでおくのは可能なんだよ！

「――――――――聖者の絶叫（エリ・エリ・サバクタニ）！！！」

ぶんっと、空を切り裂かんばかりの勢いで投擲された槍は音速を優に超えて敵機一団中心にいたガジェットに直撃。やや遅れて大爆発と共に8機近くが煙を上げて墜落していく。

――――聖者の絶叫

こいつに組み込まれた術式は目標を撃破した瞬間に周囲１０メートルに対して全方位に魔力で編まれた刃を突き出すという代物だ。他にも、『サド侯爵の愉悦』や『挽肉製造機（ミンチメーカー）』、『三葉刃（トライブレード）』といったおおよそ正義の味方とは言い難い凶悪な魔法兵器の数々をお見舞いしていく。

ここに来て航空、遠距離攻撃手段を手に入れた俺は蹂躙という言葉がもっとも似合う動きで次から次へと獲物を狩り立てていった。

しばし己を忘れたかのように狂乱に酔いしれていたが、砕けた破片が頬を叩いた時にようやく正気に戻り、爆煙の中を疾駆しながら残存戦力を睨みつけた。

増援である飛行型ガジェットはほぼ殲滅。残るは本題の欠片ども、ってところか。

中空で様子を見ていたのは甲冑姿の武者達。

全てが同じ形で量産型の造りを思わせる姿は四年前、空港の火災現場にいた奴のデチューン品と考えて間違い無いだろう。

……ようやく手がかりを見つけたぜ。

突入位置を推測しながらほくそ笑んだ。

「……こちらソード１。　これより本格的な単独行動を開始する。死にたくなかったら手出しすんじゃねーぞ」

今から始まるのは切った張ったの一本勝負。

勝てば奴らを吸収し更なる力を獲得し、負けてしまえば俺は命を失う。

そんな差し迫った状況に置かれても心は悠然に澄み渡り、冷たい闘志が漲る。

あぁ、俺はやっぱりこういう戦いを求めていたんだと久しぶりに思い出した。

四年と少し前、ただの一般人だった頃の俺が見たら卒倒しそうだな。

走行中のデスモドゥスから腰を浮かし、フロントカウルに足を掛けて座席に立つ。

（さぁ、いくぞ『村正』。元祖相棒の力を見せてみろ）

《――えぇ、御堂。存分に死合いましょう》

俺が取り出し、抜き出したのは黒鞘に収められた拵えの古い日本刀。

金色の刀身が青空にあっても不気味に輝き、速度も相まって流星のように光るそれはデバイスでも魔法の杖でもない。

永遠神剣――。超常の力を秘めた力の象徴にして俺という人間の根源的力。永遠神剣第六位『村正』だ。

ミッドチルダの世界に紛れ込んだイレギュラーの象徴であり、災禍の根源が同属に向かって敵意を露にする。

毒を持って、毒を制すは我のみ。ってか？

接敵まで数秒。今までの事柄が走馬灯のように蘇っていく。

ある目的の為、機動六課に所属する事になった俺は以前燃え盛る空港で助けたスバルやなぜかこちらを敵視する高町教導官、あくの強い六課隊員に囲まれて訓練漬けの日々を過ぎしてきた。

そんな中でやたら熱っぽい視線で接近してくるエリオやその様子を赤らめた表情で凝視するキャロ。ワンコのように慕ってくれるスバルに俺にだけ暴力的な突っ込みを入れるティアナなど、同期連中は色々と扱い辛かったな。

いや、だからといって専属指導員でもあるシグナム姐さんを初めとした八神一家には何度も殺されかけているので一概に彼女達だけがきびしいというわけではないがな。

そして唯一優しく接してくれるフェイト嬢は胸の大きさも相まって一服の清涼剤として申し分なく、出来ればお近づきになってキャッキャッ、ウフフしたいが如何せん障害が多すぎる。この騒動が終わり次第、何か策を打たねば……。

……若干、雑念が混ざりまくったが、ようやく欠片の連中と戦いになったのは何よりも幸いだ。

だってこれで少しでも　―俺の為に倒れた―　ユーフィーの回復

に繋がるのだから。

どこか歪んで澄み切った心持ちが開戦の祝詞を唱えさせる。

さぁ、機械と神剣との間に生まれた異形の武者よ。

お前達の求める怨敵はここにいる。俺の求める代償はお前達なのだ。

空いた左手を本格的な開戦開始と言わんばかりに中空へ差し出し、天を駆ける武者同士の戦いがいざや始まらんとしている。

「――鬼に逢うては鬼を斬る。

――仏に逢うては仏を斬る。

――――ツルギの理（ことわり）

ここに在り！」

世界に散らばった永遠神剣の奪い合い。

これはそんな日々の先行した記憶。

永遠神剣――

所有者に絶大な力を与え、その代償としてマナを集めることを求める武器。神剣と呼ばれているがその形状は剣に限らず、槍や爪、ランタンなど多種多様。神剣には第十位から第一位までの階位が存在し、数字が小さくなる程強大な力と、明確な意思を持っている。

また第三位以上の上位永遠神剣に認められし者は生命体としての寿命が消え去り、殺されない限り死ぬことは無いという特性を有する。

通称、エターナルと呼ばれる存在へと昇華する。

――――――――――――――――――――

「うおっ、眩しっ！！」

いきなりな怪奇現象に思わず叫ぶ

何だ、何が起こってるんだ！？

比良坂鞘吾（ひらさかしょうご）こと俺はこんな怪異とはまったくの無関係な一般市民で今も普通に学業を終えて、帰宅。何事も無く放課後が始まろうとしていたはずだ。

瞼を閉じていても差し込む強烈な光が自室一面を真っ白に染め上げ距離感すら掴めない

なに？　何なの？　どうなってるの？

反射的に腕を掻き回し、警戒してみるが腕は空を切るばかりで何の反応も返らず発光だけが続いている

……怖い

久しく感じていなかった感情が胸を打ち、目の前に怒った異常のせいで感情が恐怖で埋め尽くされてしまう

あぁ、神様、仏様。普段は都合の良い時にしか信じていませんがどうかお助けください

今度からは賽銭を五円から五十円、もしくは五円玉二枚にしますからなにとぞお願い致します！

体が自然と竦み上がり、まるで審判を待つ罪人のように身を硬く光

が収まるのを待つ

そして……

……

……

……

……

……

「……長いわっ！！」

セルフ突っ込み。発光はすでに五分以上経過しているのにも関わらず目立った変化は生じていない

なにこの、すごい肩透かし感

ラジオだったらとっくに放送事故として処理されてしまうのではなかろうか

（くっ、こうしてても仕方が無い。とりあえず部屋から出て状況確認しないと……！）

まさか急に白内障にかかったのかも知れない

この場にいたって何も変わらないみたいだし原因を探るのはそれか

らだ

慎重に手を突き出し、ぶつからないよう扉を目指す

前は見えないが狭い自室だ、いつかは外に出られるだろう

足元に散らばるゴミやゲームソフトを足で掻き分けていると不意にバランスが崩れた

「！？　しまっ……！」

当たったのは恐らく×箱３６０

マジかよ！？　さっさと売っぱらっちまえば良かった！

バランスはものの見事に崩れ去り、視界ゼロも手伝って抵抗も出来ない

なんとか腕だけでもと力を込め、指を開き

――ふにょん

……どこかでよく見る展開に見舞われた

「きゃあぁぁぁぁ！！！？？」

一瞬遅れての大絶叫

あぁ、あのイベントですね、分かります。と理解しながも手は離せない

両手に収まるふくよかな感触は名伏せがたいほど心地良く、本人の意思とは関係なくわきわきと鷲掴んでしまう

当然、こんな変態的行為を先方がいつまでも許すはずもなく

気がつけば壁に向かってぶん殴られていた

「……我が生涯の一片の悔い無し……ガクッ」

ＤＥＡＤ　ＥＮＤ　　ケース？１　予定調和

「死んだ！？　うわわっ！？　そんな事になったら困ります！」

どうやらコンテニューはあったらしい

甲高い声を聞きながら朦朧とする意識をなんとか奮い立たせて目を開く

「……くっ」

あれほど眩しかった視界はすっきりと晴れ渡り、様々な色が目に飛び込んでくる

ふぅ……新たな問題が起きそうな予感がとてつもなく感じられるがとりあえず少しは落ち着けるな

目の前に映る荘厳な摩天楼を確認してほっと息をついた

……摩天楼？

「……」

「ええっとですね。その、さっきのはお互い忘れましょう！　わ、わわ、私頑張りますから！　円滑な人間関係にはあんもくのりょうかいが必要ってパパも言ってました！」

「……」

「時深さんをおｂｓｎって呼んじゃいけないとか、だから、えっと……」

「……ユーフィー。相手、話聞いてない」

「えっ？」

思考回路はショート寸前。　そんな懐かしいフレーズが浮かびます

「……それとこの世界は危険。……速く離脱しないと」

「ここって……」

「……アーカムシティ」

聞いた事無い名前だなーと腰を抜かした状態で考える

今居るのは恐らくビルの屋上

すぐ前には巨大な時計塔と他にもヨーロピアン？な建築物が所狭しと乱立しているこの光景は恐らく俺の部屋じゃない

むしろ確定クラスでそれはありえない

てゆうか夜だし、家に帰ったの夕方だったよな

しかも一棟、一棟がとてつもなく高いんだなこれが。下を見れば人が米粒以下のサイズに見えると言えば理解してもらえるだろう

……どうしてこうなった

着替え途中のカッターシャツ姿でしばし放心

急転直下の事態に頭が追いつかない俺を他所に二人の人物が何か喋り合っている

一方は青髪で幼い顔立ちの、ユーフィーと呼ばれた少女

さらさらとしたロングヘアーがとても似合っている

……少し違和感。どこかで見たような……？

もう一人は何時の間に現れたのか、はたまた始めから居たのか、見下ろすように佇む同じ歳ぐらいの女性

赤い髪をサイドポニー風に纏め、蝶みたいな髪飾りで固定。やたら目立つ格好だな

どちらも共通して結構な美人だが何より目を引くのは二人の服装だ

まるでゲームの登場キャラクターのように装飾豊かな服装と見るからに重そうな鎧っぽいのを身に着けている

……コスプレにしては本気すぎね？

「……ちょっといいかい」

ある種、諦めの境地にも達していたであろう精神状態で口を開く

「……なに。急いでるんだけど」

反応したのは赤い方

ジトーと擬音が出てきそうなくらい見つめられてた

「これは夢ですか？」

「いいえ、違います。」

「そうか」

「そうです」

「……」

「……」

わお、全然状況が掴めないや♪

……素っ気無いなんてレベルじゃねーぞ

「……っ　……まずい、感づかれた」

「え？　アリアちゃん、どうしたの？」

「……敵が来る。……こいつに『村正』を、『永遠神剣』を渡しておいて……自衛ぐらいしてもらわないと」

赤い髪の女（アリア？）は何時の間にか片手に短刀のような物体を握り締めている

「おーい、いくらなんでも置いてけぼり過ぎるだろ。せめてここは何処かくらい……」

「待って！　今ちょっかいを出したらさっきみたいに座標がズレちゃいます！」

「……界峡選択。回廊取得。階層指定。———巡れ、巡れ、マナの奔流。我は開門願う者なり」

つらつらと呪文みたいなのを呟くと彼女の回りにさっきまで視界を埋め尽くしていた光が幾何学模様を描きながら現れた

「とりあえずこれを持っててください。この程度の力なら　以前みたい　にはなりませんから」

「以前って、わけの分からない事を……ん？　これって刀か？」

どこから出してきたのかユーフィーと呼ばれた少女が差し出してきたのはまさしく日本刀

生で拝見する日がこようとは思わなかったな

よく見れば彼女も槍みたいな得物を後ろ手に構えてるし、どうやら何かしらの危機が迫っているようだ

急いでくれと哀願するような瞳で訴えかけられた

「……うるうる」

「口で言うの！？……あぁもうっ、後で必ず説明してもらうからな！」

勇気を振り絞る、悪くいえば半ばヤケクソになって刀を掴み取ったどうやらこの状況を潜り抜けなければまともに説明すらしてもらえないらしい

取ったと同時に立ち上がり思いっきり深呼吸をする

「……とりあえず目的の時間樹に移動するから。準備できるまでお願い」

「お任せ！」

槍を振り回すユーフィー（仮）

これはあれか？　今からタイミングよく敵キャラが出てきて次回に続くみたいな展開になるのか？

……

いやいやいやいやいやいやいやいやいやいやいやいや

そんな馬鹿げた話が……

「――ほうほうほう、我らの魔術体系と異なる力を感じ取ってみれば、これまた珍しいお客人を見つけてしまったな」

「マジかよ……」

馬鹿げた話だけならまだマシだった

突然の声の主は宙を浮かびながら話しかけてきている

「うん、うん。これは面白い。面白いねぇ。紳士としては懇切丁寧な挨拶を心がけておかなければいけないかな」

スーツ姿にマントを羽織った髭面の紳士がにんまりと笑いながら仰々しく頭を垂れる

「ワタシの名前はウェスパシアヌス。しがない魔術師とでも名乗っておこうか。……麗しいお嬢さん方、失礼と存じているがお名前をお聞きしてよろしいかね？」

俺、ガン無視

「……まだ貴方達に干渉するつもりは無い。あっちに行ってて」

「まだ？　ほほぅ、まだと言いなさるか！　これは手厳しいなぁ、淑女の遠まわしな断りは慣れているがそういった含みを持たされると思わず期待してしまうね」

「……チッ」

失言だ、とばかりに舌打ちをする赤い少女

「あの！　無断であなた方の敷居を跨いだのは謝ります。けど私達には大事な役目があるんです、見逃してくださいウエハースさん！」

そんなおいしそうな名前だっけ？

「かかかっ！　愉快なお嬢さんだ。まぁ、ワタシ個人としては再会の言葉を信じてもいいのだがね。これでも宮仕え、君達を捕縛せよとのお達しを受けているのだよ。……すまないがご同行願おう」

ゴウッ　と

ウエハース（仮）の雰囲気が一変した

どす黒い陽炎のようなもやが背後から噴出し、紳士の体に巻きついていく

良く分からんが嫌な予感がビンビンする

手に持っているのは……本？

「っつ！　アリアちゃん、残り時間は！？」

「……二十……十分でやる」

「了解！　お話して駄目なら押し通らせてもらいます！」

「ほほう！　戦いなさるか！　いいね、いいねぇ、素晴らしい！　若さゆえの過ちか年寄りの冷や水となるか実に楽しみだよ！」

対峙する二人

横では赤いのがぶつぶつと短刀を抱えて目を閉じている

……おいらは完全にアウトオブ眼中ってやつですか

漫画やアニメでしか見たことの無いような荒唐無稽な戦闘が今まさに始まろうとしていた

――この物語はそんな絶大ともいうべき力を得てしまった人物の新しい冒険譚

まずはそこに至るまでの与太話、過去の物語から始めてみよう

――――――――――――――――――――

例えば、生まれながらの聖人が居たとしよう

彼、もしくは彼女は慈愛に満ち、誰であろうと救いの手を差し伸べる類稀なる資質を秘めている

貧困する者には自らの食料を分け与え、心荒む者には無償の愛を授け、自分より他者を優先する行為を尊ぶ

それはとてもとても素晴らしい行いなのだろう

では、彼、もしくは彼女が過去に一度も誠意に触れた事が無かったとすれば、聖人と呼ばれる行為を果たして行うだろうか？

食べる物は他者から奪うという光景しか目にしていないとしたら？
害なす者を全て排除しなければ生きられぬのならば？
聖人だって人だ。過去に愛を知らなければ人格なんて簡単に変わって犯罪に容易く手を染める
それはとてもとても仕方の無い行いなのだろう

例えば、生まれながらの極悪人が居たとしよう
『彼』は今迄、幾千幾万の命を奪い取り、己の糧としてきた
物心ついた頃には一人、家族も友人も見たことが無い
孤独という言葉すら知らない常識の中で生活している
良心の呵責という言葉は知らなかったし、弱い者は淘汰されて仕方ないと、なんとなく頭で理解し、誰彼構わず殺し続ける毎日を送った
どんな生き物の死も他者である自分にはまったく関係無いし、物心ついた頃からの習慣に疑問を挟む余地を感じない
そうして彼はいつからか生まれながらの極悪人とまで呼ばれるまで命を貪り殺す存在となった
それはとてもとても仕方の無い、けれどどうしようもなく愚かしい行為なのだろう

そう、人格形成に欠かせない要素の一つに過去の記憶は非常に重要な意味を持つ。

だがある日、『彼』が気まぐれに立ち寄った街で逃げ惑う家族を串刺しにする行為に興じていると、一人の少女が目の前に忽然と現れた

周囲には燃え盛る家や人間、空は黒煙に包まれ、陽は届かない。怨嗟の呻きが響き渡るこの場において、なお映えるかのように輝く麗しさが目を引く

淡い青色をした髪と真っ白な羽根を揺らして寂しそうな瞳を持つ少女だ

幼さが目立つ顔立ちとは裏腹に自分より大きい槍のような武器を構えているのが少しだけアンバランスだが、どこか完成された美を感じる

「……」

彼女は語らない。脇目も振らず、じっとこちらを見つめるだけで直立不動の体勢で佇んでいる

（誰だろう？）

久しぶりの疑問。彼は無意識に己の得物である『永遠神剣』を握り締めた

物心付く前から共にあった『彼女』は唯一信じられる存在だからだ
純粋な興味より先に今迄感じた事の無い焦燥感が早鐘を打ち始め、
心臓を突き動かす

「……君は？」

何年かぶりに声を発したのだと思う

『彼』はうまく発音できたかも分からないまま語りかけてみた

短い沈黙

パチパチと建造物が燃え散る音に紛れ、もう一度声を掛けようとしたところで彼女に動きがあった

とりあえず意味は通じたのだろう。黙していた彼女が可愛らしい唇を動かしたのだ

「――私は『悠久』のユーフォリア、です」

「……悠久？」

それは名字か何かだろうか？

少しだけ気になり顔をしかめた

『――！！？』

しかし、この言葉に過剰反応を示す存在が行動を開始する
それは彼でも彼女でも無い。無機物の細動
『彼』の持つ曲がり歪んだ両刃双刃の大剣　永遠神剣第二位『森羅（しんら）』が周囲のマナを奪い損ねた住人の命ごと急速に吸収しだした
炎は天を突くほどに逆巻き、突風は竜巻を、屍骸がそれに引き寄せられてばらばらに分割されて降り注ぎ、まるで彼女を警戒するように『森羅』は周辺の町並みを地獄絵図へと変えていく
「名も無きエターナル、貴方を止めてみせます。……私と『――』が」
小さな少女の後ろに突然、人間？　が現れた
前髪が顔を覆い、表情は窺い知れないがこちらに対して明確な敵意を向けてくるのだけは理解できた
……更に警戒を高める『彼女』
味わった事の無い感情が心のどこからか滲み出してくる
この後、
正確にはひと悶着あった後で『彼』、いや『俺』は記憶と力を失ってしまった
気がついた時、というか物心ついた時にはただの人

転生うんぬんでは無く、時間逆行とかそういうので人生をリセットしたらしい

化石燃料の取り合い、エコだのなんだの言い争い、核やテロという自滅行為ばかりしている世界に普通の人として生活していく

中流家庭に生まれ、うざくならない程度に他者と交流を持つ人の生き死になんて親戚の葬式ぐらいの波乱一つ無い平凡な毎日

生まれついての極悪人は殺し尽くした過去を失い、そこそこの常識と愛を感じ取って普通の人生を歩めるようになった

それはとてもとても素晴らしい事……なのだろうか？

例えば、普段通りネットやゲームに興じている自分に隠匿された過去が無いとは言い切れない

もしかしたら記憶を封じられ、何かがきっかけでそれが目覚めるかもしれないという思いが幾度か胸に去来する

強風吹き荒ぶ空き地で両腕を広げたり、雨の降りしきる街中で一人だけになったような感覚を覚えるのはその残滓、なのかもしれない

それが事実だと否応にも認識させられたのはまったく脈略も無い、フラグ一つ起こっていない日常のひとコマだ

いつも通り、高校から家へ直行、自室で習慣のようにパソコンを立ち上げて着替えを済まそうとしたその瞬間

眩い白光が部屋を包み込み、視界が覆われた――。

これが物語、本当の始まりである。

第二話　神剣†接続　目覚める力と醒めない現実

「やぁぁあああああ！！」

「ぬうっ！」

闇夜に紛れて眼前で繰り広げられるのは人間同士の空中戦、いわゆるドッグファイトの様を展開している

縦横無尽にビルの隙間をすり抜け、アーカムシティ上空を恐ろしく早いスピードで飛び交っている。一般人である俺には二人の残像っぽいのしか見えんし、これがヤムチャ視点というやつなのか？

ユーフィーと呼ばれた少女と髭面の紳士、ウェスパシアヌスは空中で激しく衝突し、時には魔法かビームとしか思えないような光の束が交錯していく

時折聞こえてくる「プチニティー、リムーバァァーー！」なんてセリフはいわゆる必殺技の掛け声だったりするのだろうか

すごく……可愛いです

十分前くらいに普段通り着替えをしていたのが夢のようだぜ

「……そうなら今すぐ覚めてくれ」

ビル風が強いせいか、若干涙目

試しに頬をソフトタッチで抓ってみる

運が良ければこのまま目が覚めるはず

むにゅぅ

「……ですよねー」

意外に柔らかい。すべすべとした肌触りがしっかりと返ってきた

これは間違いなく現実の感触だ

落胆の溜息を漏らし、手を離す

「……何するか」

「いやー、ちょっと現実か夢かを確認したくて」

ちなみに実験台は赤い子にお願いしてみました（無断で）

「……さっき、ちょっかい出すなと注意した。……人の話は聞け、愚昧」

横一文字の眉が微かにつり上がり抗議の視線を浴びせられる

間近で見ても表情が分かりにくい奴だな

「聞いてたけどさ、　なんとなく　君の雰囲気が落ち着いたみたいだし、もうそろそろ良いかなーと思ってお茶目してみました。一大事なのは分かるけどちょっとくらい構ってくれてもいいだろ」

「……わがまま、自己中、自重しろ」

だって寂しいんだもん

「……（確かに後は回廊が繋がるのを待つだけ。……こいつ、マナの流れを？）」

「ん？　小声で聞こえないんだが」

「……お前に関係無い」

俺を拉致した原因が言うか

ジト目でガンを飛ばされるが元の顔立ちが整っているせいかあまり怖くない

目を逸らすのも癪なので見つめ返す

「なあ、掻い摘んでで良いから説明してくれよ。俺はなんで連れて来られたんだ？　目的は？　理由は？　そもそも君達は誰なんだ」

当然の質問を捲くし立てる

現実らしいのは理解したがドッキリやアトラクションの可能性は極めて低い

恐らくは俺の持つ常識の範疇を大きく上回る事態になっているのだろう

流され続けて取り返しのつかない事態になる前に現状の把握ぐら

いしておきたい

ぐっと目に力を入れて訴えかけるとようやく彼女が折れた

「……仕方ない、概略だけ教えておいてやろう」

「ありがとうございます！」

周辺には飛行中の二人が飛び回っているがどうせ何を出来ないんだ。ここはユーフィーちゃんに任せよう

こほんと一つ咳払いをしてから赤いのが口を開く

「　……私達、神剣保持者

……任務を受けてお前を捕獲しに来た

……めんどくさ」

「もっと三行目を有効に使ってよ！？」

今北産業が出てきたのもびっくりだけど途中で諦めるのは新鮮すぎる

「……えー」

「いや、マジ、真剣にお願いします。正直、貴方が話を進めてくれないとにっちもさっちも行きませんから」

刀を持ったまま両手を合掌して拝み倒す

たぶん被害者である俺がなぜここまでしなければいけないかは置いといて、今はこの子に頼るしかない

……今は、な

「……一瞬、不穏な空気を感じた。……仕置きは後ですると して、いいか良く聞け蓬莱ニート」

ニートちゃうわ

「……私の名前はアリア。そして今戦ってくれているのはユーフィー、二人とも『永遠神剣』所持者と呼ばれてる。私達はある組織的な集まりから任務を受けて、比良坂鞘吾を失われた神剣の回収の為に引っ張り出せと命令された」

無口な感じだったけど意外に説明キャラだったらしいな。セリフに淀みが感じられない

赤い少女、アリアは今度こそ真面目に、音量はそのままはっきりと伝えてくれた

「永遠神剣……？　集まりっていうのは……」

質問しながらなぜか心臓が一オクターブ跳ね上がる

拉致の原因よりなぜか永遠神剣というフレーズが気になった

「……神剣はマナと呼ばれるエネルギーを代償に、持ち主へ力を与える触媒の総称。……基本的な特徴として身体能力の向上や

術式理解による魔法の使用が可能になる。様々な世界に散らばってるから本当は珍しくない。……実物はこの短剣『詠鐘』やユーフィーの持ってる『悠久』、それとキミの第六位『村正』も形こそ違うけど同じカテゴリーになる。……本当は少し違うけど」

という事は俺も空中で戦ったり、ビームを撃てたりするんだろうか

……ちょっと期待

「……組織は……今、関係無い。ローガス、適当だから」

何を思い出したのか、あからさまに呆れた様子のアリア

短剣を握りながらもだらんと腕が下がった

嫌な上司？　はどこにでもいるって事か

「という事は……ま、まさか！？　俺は選ばれた存在とかいうやつか！　永遠神剣に認められし古の勇者的な……」

「……自意識過剰、厨二病。そんな大層な人間なわけない」

言葉の短剣が突き刺さるっ！！

「……でも、永遠神剣に認められたのは当たらずとも遠からず。任務の目的はキミが　以前　保持していた神剣を回収する事だから」

「以前……？　そういやユーフィーって子も同じ事言ってたけど、俺にそんな記憶は存在しないぞ？　人違いなんじゃ……」

「……それは無い。キミは記憶を消して一から人生やり直してるから分かってないだけ。詳しくは知らされてないけど、かつてエターナルと呼称された神剣保持者だったらしいのは聞いた」

「う、ううん？」

失った記憶？　エターナル？　……頭が混乱してきたぞ

「……目的の詳細は四つに砕かれ、行方知れずになった上位永遠神剣第二位『森羅（しんら）』の復活及び回収。そのために以前の持ち主であるキミを呼び水に、各世界に散らばった神剣の欠片を集めようと思ったわけ」

「ええと、つまり……どういう事だってばよ」

「……こっちの都合で平和な暮らしをしていた人間を巻き込みに来ました」

「直球すぎる！！？」

いかん。自分で説明を要求してなんだが、聞いて損した気分だ

「……運命だと思って諦めたほうがいいと思う」

ポンポンと肩を叩いて励まされた

くそっ、人事だと思って

まさか本当に漫画や小説みたいな事態に巻き込まれるとは露ほど

も思わなかったぜ

「あー、要は神剣『森羅』とやらを集める餌役として協力しろって事なんだな」

過去うんぬんは良く分からんが俺にしか出来ない役目らしいな

「……そ。ちなみに拒否は不可。元の世界に返りたければ馬車馬のようにひたむきに誠心誠意手伝う事」

なんかむかつく

とりあえず拒否権が無いのは理解したが……

やれやれ、玄関開けたら二分で異世界か、……シャレにならん

「……サービスで一本は見つけておいたから、がんがれ」

「は？　こいつは『村正』なんじゃ……」

「……神剣とは元々単一の存在。破壊されない限り、どれだけ分割されても名前と力を変えて存在できる」

「ふーん、便利なんだな」

「……残りの内、二本はどの世界にあるかまで判明してる。一本がミッドチルダ分枝世界、もう一本は、ここに『咆哮』という名で存在するらしい」

「結構手がかりはあるのな。……ん？　だったらここで一本回収

していくって事か？」

「……今はまだ駄目。　この世界はマナが少なくてうまく力を出せないから、ちゃんと対策してこないと痛い目を見る」

やれやれといった様子で息をつくアリア

そっちはそっちで色々苦労があるらしいし、男一人悲観ぶってたらみっともないな

うん。ちょっと気合入れて頑張ってみるか

「――うん、うん。実に興味深い話だ。マナに永遠神剣、異なる世界か。アザトースを使用しない力場の秘密といい、いやはや参考になったよ、ありがとう」

「！？　お前、さっきの子と戦ってたはずじゃ……」

突然の声に驚いて声のした方向へと振り返る

そこにはついさっきまで交戦していたはずのウェスパシアヌスが悠然とこちらを眺めていた

「うん？　あぁ、青い髪の少女の事か。確かに彼女は強かったよ、とてつもなく強かったさ。順当に行けば生身のワタシでは勝てなかったほどにね。だがね、しかしだ、如何せん経験が足りなかったなぁ、まさしく亀の甲より年の功といったところの結果だったよ」

パチンッと指を鳴らすウェスパシアヌス

何事かと思えばゆっくりと立ち並ぶビル群の隙間から肉塊で出来た１０メートルほどのモアイみたいのが顔を出し、どろどろとした額にユーフィーをくっ付けている

「……ユーフィー！」

アリアが叫ぶ。薄目は開いてるみたいだが抵抗もできないくらい弱っているのか、ぐったりとした様子で返事が返ってこない

……無性に胸が締め付けられる

「彼の名前はガルバ。ワタシの可愛い使い魔さ。さっきまでは君達の会話を偶然聞いてしまっていたようなのだが、今はほら、彼女をいたく気に入ってしまったようだ」

「……盗み聞き」

「はっはっは。これは手厳しい。いや、どうも彼は手癖が悪くてねぇ。失礼した！　あとでちゃんと叱っておくから許しておくれ」

大袈裟に肩を竦めて片目を瞑る

言葉だけの謝罪とはこの事だな

「……わざとらしい」

「激しく同感だな」

二人してウェスパシアヌスと向き合う

「おやおや、目が怖いじゃないか二人とも。これはあれかね、仇討ちとかそういう類の念を抱いているのかな？」

にやりと笑い、おどけた様子で両手を広げた

「だとしたらそれは無謀というものだ。話を聞くに、赤い少女の方は会話こそ出来るようだがその術式を維持しなければならないのだろう。けれど青年はどうやら巻き込まれた一般人。それでは勝てぬよ、勝てるわけが無い。肝心要の力がまるで足りない」

確かに、アリアの表情は無表情ながらもしっかりと怒りの色が見て取れるが攻撃したりこの場を動こうなんて仕草は起こしていない

じっと我慢するように短剣をきつく抱いている

どうするべきか

鞘悟は普段使い慣れない脳をフル稼働させて考えた

自分に戦闘能力がないのは百も承知

けれど今動かなければ間違いなく良くない事が起きる

ユーフィーちゃんが起き上がる気配はないし、アリアも脱出の準備で動けない

ここはいっそ降参してみるか？

いやいやいや、あからさまに怪しい雰囲気のおっさんに身を委ねるのは危険すぎる

綺麗なお姉さんはともかくおっさんはお呼びでない

だとしたら俺だけ走って逃げる……のも無理な話だよな

そもそもビルの屋上だから逃げ場が無い、それに相手空飛んでるしな。すぐ追いつかれるのは自明の理だ

第一、頑張ってくれているアリアの努力を無駄にしてしまう

これだけ我慢してるんだ、この場この時でないと何かしら不都合があるはず

それを無碍にしたらよりいっそう面倒な事態に陥りそうだ

まさに引くも下がるも退路無し

レベル足りないのに七英雄直前でセーブしてしまった感じだね

詰んだ。無理ゲー。開幕１０割。ゲームオーバー。今度こそＤＥＡＤＥＮＤに向かってまっしぐら。あの世への片道電車が出発準備中だ

――――

――あぁ、でも

「んん？」

「……キミ」

「……抵抗も何もしない。ってのは男が廃るよなー」

ずい、とアリアを守るように体を滑り込ませた

「うーむ、勇気ある行動と賞賛したいところだが、それはただの蛮勇ではないかね？　万が一にも君に勝ち目は無いと思うのだが」

「んなもん自分が一番理解してるっての。けど……」

ちらりと捕まったままのユーフィーちゃんに視線を移すと彼女は目立った傷は負っていないものの、いまだ浅く呼吸を繰り返すだけで生気が感じられない

その姿を見ているとなぜだか異常なほどに　自分が　許せない

会ってろくな会話も交わしていないのに彼女を守らなくちゃいけない衝動に駆られてしまった

「……あんたが憎いよ、ウェスパシアヌス。途轍もなく、途方もなく、とても、とても、際限無いほどにな」

わざと口調を真似して睨みつける

右腕はすでに刀の柄を握り、臨戦態勢だ

ここが正念場

どこまで出来るか分からないけどアリアの話じゃ、この永遠神剣の力で俺は強くなってるはず

どこぞの赤い配管工のおっさんが開幕ダッシュで突っ込んだらキノコ野郎にぶつかって死亡。みたいな展開にはならないだろう

それに

「（準備までに後どれぐらい掛かる？）」

「！　……（緊急手段を使う。……三分待って）」

小声でタイムリミットを確認

アリアが途端に集中しだす

冷静に考えてみれば倒す必要は無いんだよな

だったらなんとかなるか？

ばれないよう目配せ一つだけして意識を集中する

「どうやら覚悟は決まっているようだね君は。かかっ、まさにエクセレントッ！　それこそ若者だけに許された特権だ、懐かしいよ」

今度はパチパチと両手を叩き、目を細めた

どこまでも尊大で余裕を持った、けれど人を見下す態度が鼻に付く

「行くぞ、ウエハース爺さん。……今日は死ぬには良い日だ」

口からでまかせを吐いて、右手に力を篭める

「そうだ！　昔を思い出させてくれた礼に良い事を教えてあげよう。ワタシにはね……」

そして思いっきり刀を引き出

「――使い魔がまだいるんだよ。君の、すぐ傍に」

「っ！？」

視界が突然、横方向へと真っ直ぐに引き伸ばされていく

それはまるで高速道路をフルスロットルで駆け抜ける車の景色のように尾を引いた

「……キミ！」

瞬間、右半身に激痛

続いてじわじわと左側も痛みを訴えてきた

どうも何かに叩きつけられたみたいだ

パラパラと頭の上に石ころが降ってくるところを見ると昇降口まで飛んできたのか

「…がふっ……！　痛ぇな、この野郎……！！」

吐血なんて人生初体験だぜ

壁へ寄りかかるように体を預ける

「なんと！？　オトーの体当たりが直撃したというのに生きているとは！　いやはや、先は動きを封じるのが精一杯で分からなかったが、君は、いいや、永遠神剣とはまったくもって素晴らしい代物じゃないか！」

どうやらユーフィーも同じような手段で不覚を取ったみたいだ

卑怯にも程がある

あぁ、ミスった。体の左半分がひどく熱くて、まるでぐしゃぐしゃになったみたいに自由が効かないが聴力はきちんと機能してるらしいな。耳障りな声がはっきりと伝わってくるがむかつく

「……神剣と接続（リンク）して、早く！」

アリアの叱責

接、続？　いや、言葉は聞き取れるが、肉体が痛みを処理するのに精一杯で意味を読み取れない

どこか俺に不備でもあったんだろうか

『村正』は辛うじて握り締めたままだがこの分じゃ刃を抜くのでさえ一苦労だ

あーあ。配管工どころかスペランカークラスのあっけなさだな、これは

「頑丈さについては目を見張るものがあるな。うむ、これは都合が良い。……君達、ガルバに注目したまえ」

這い寄るように隣のビル屋上によじ登るモアイもどき

その額には当然、ユーフィーが捕まったままの状態だ

こいつ……何をする気だ？

ウェスパシアヌスはゆっくりと彼女の傍らへと滑空し、再度、指を鳴らした

溶けるように目の前へと現れたのはガルバと同じ、肉で形成されたモアイ

こちらを監視するように佇んでいる

「こらこら、オトーではなく、ガルバを見たまえ。こいつのほうがやや丸みを帯びて可愛いらしいだろう？」

分かるか、こら

「まあ、冗談はさておき。これから君達に脅迫をしたいと思うのだが如何かね？」

「……どういう意味」

ろくに発音できそうに無い俺に代わってアリアが疑問をぶつける

何時の間にか彼女の周りにはさっきより　純度の高いマナ　が漂

っていた

「簡単な話だ。無駄な抵抗は即刻止めたまえ。でなければこの娘を代わりに痛めつけるぞ」

「「！！」」

ガルバの肩口辺りから丸太のような腕が生えてきた

「大切な人間を盾にするのが何時の世も有効で最適な手段。……お嬢さん、術式の改竄はそこで止めてもらおうかな」

「……何の事」

「シラを切るとは情けないなぁ。彼が剣に手をかけた辺りから力場が規則正しく変動してるじゃないか。それをただの偶然とでも言い張るのかね？」

「……チッ」

今度の舌打ちは吐き捨てるように

苛立たしく目を吊り上げると光が除々に小さく萎んでいく

「うんうん。従順なのは美徳だよ。けれど君は大分賢しいようだ。そういう子にはあらかじめきつい釘を打っておかないとね」

「……えっ」

きょとんと大きく表情を変えたアリア

その様子を満足そうに眺め、右腕を掲げるのはウェスパシアヌス

「腕の一本くらいは見せしめとして潰しておこうか」

口元を歪め、わざとらしく大げさに腕を下ろす

その動作をトレースするようにガルバの腕が持ち上がり、降下を開始した

恐ろしく早く、力強い圧力がここにいても伝わってくる

……いや待て、なんだこれ。

全身を襲う激痛のおかげで逆に意識がはっきりしてきた

こんなのは聞いてない。拉致されたのだって納得してないが、これは酷い

ただの庶民の目の前でいたいけな少女が痛めつけられる

特殊な性癖を持っていない俺にとってこれは拷問を見せつけられているのと同義

駄目だ

駄目だ。

駄目だ！！！！！！！！

自分でも理解できない感情の津波

それは、なけなしの常識や倫理感全て押し流して思考をクリアにしていく

何を恐れる、何を躊躇う

彼女が傷つくのは　もう二度　見たくないはず

ならば戦え、ならば護れ、

徹底的に暴力的に蹂躙する剣となれ、天を衝く城塞が如き堅牢さで楯となれ

闘争こそが我が本懐、守護こそが我が天命

しからば行動は一つ。状況を把握し、最適な手段を構築すべし

視界

対象に向かっての攻撃動作を確認、脅威と認定する。

予測　　――破壊力は中の下と

対象

彼女は動かない、動けない。抵抗する意識さえ残っているか不明。

——自力脱出の可能性

を排除

時間

制限時間は一秒を半分に割り、もう一度半分に分けた秒数。

——若干の猶予有り、

されど急がれたし

現実

当たれば間違いなく対象が傷つく。己の不甲斐無さによって

——行動の最速化を推奨

推察

実行されれば、何かが終わる。予感めいた衝動を確認。

——了承。『永遠神剣』

へのマナ接続を開始

結論

眼前、敵機を速やかに破壊せしめん。

「　村正ァァアアアア！！！！　」

鬼が如き咆哮が空気を振動させ、大気を震わす

極限状態からの帰結は覚醒を促し、０．００１秒以下の速度で俺の体を作り変えた

漲るマナの胎動、膨れ上がる膂力、壊れかけていた肉体がマナという神位の力で再構築されていく

すかさず抜刀

金色に染まる刀身が闇夜のアーカムシティに光を灯す

同時に頭に直接響くような女性の声、『村正』が金打声で身体情報を伝達してきた

《――再会の挨拶は後回しね、御堂。……現状で再生し切れない箇所は、腰部、右脚、左脚、左腕の四箇所。地面を蹴って飛びかかるのは不可能よ》

精神間での会話時間は限りなくゼロに近い

それでも逸る気持ちが無理矢理に体を突き動かす

五体はぼろぼろ。四肢は鈍重。三半規管は機能せず、二本の足は棒切れ同然。どんなに力が溢れていても稼動する肉体がこれでは万全の戦闘行動は不可能だろう

（……右腕の損傷は）

《利き腕は最優先で処置済み。全力で刀を振るいなさい》

こちらの意図を察していたのか、どことなく声を弾ませる『村正』

そう、この体は活力で満ち満ちている

たとえこの身が砕かれようと、心は折れぬ

腕一本、突き立てる牙さえあれば……

「《――――戦闘に、一切の支障無し！！　》」

足元でマナを爆発させて飛翔

乱暴というよりは無謀、お世辞にも華麗とはいえない不恰好な姿勢で敵へと突貫する

その刹那の出来事は

同じビルにいたアリアもほくそ笑むウェスパシアヌスさえも認識できなかった

二人が気が付いたのは数瞬後、もたらされたのは少女の絶叫では無く

ユーフィーを拘束する肉塊の使い魔が消滅する光景だった

第三話　序盤†決戦　残した禍根と電磁撃刀（前書き）

今話でプロローグ終了……ではなく、もう少し続きます。

次話はリリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ本編の４年前、火災現場にいたあの子の元へ。

そこでようやく第一部へ移行予定だったり。

第三話　序盤†決戦　残した禍根と電磁撃刀

マナの奔流が足元のアスファルトを陥没させて唸りを上げる。

目標は眼前、距離にして３０メートル程離れたビルで凶手を振り落とそうと、いや、すでに降下を開始させている

……間に合え！

異常なくらい澄み切った意識を下半身に集中し、マナの流れを整流化。足の裏に一点集中で爆発させた。

原理なんて分からない。けど体の内から流れ込んでくる力の使い方は澄み通るように理解できる。

ロケット花火のように体が打ち出されると同時に刀を背中に担ぎ、姿勢制御もしないまま更に加速。

使い魔に体当たりを喰らった時よりも視界の景色が細く長く伸びていく。

通常の考えでは絶対に届かない距離から目標まではすでに目と鼻の先。と同時にガルバの腕も少女の前髪に掛かるほど肉薄し、今まさに激突しようとしている。

「おおぉぉぉぉぉ！！！」

乾坤一擲

コンマ一秒以下の世界で雄叫びを上げながら大上段の袈裟斬りを放つ。

それはまさに流星の如き、一矢。吸い込まれるようにガルバへと振り落とされた。

ユーフィーには当たってくれるなよ！

元より停止を考慮していないこの一撃は無茶な飛行のせいで狙いが甘い。手元にははっきりと肉を断ち切った感触が残っているがこれが敵のものだけとは限らない。

あまりの速度と勢いに体がぐるりと反転したのを利用して、見上げるように交錯した瞬間を目に刻む

そこには真っ二つに裂けた肉のモアイと――無傷にままビルに落下するユーフィーの姿。

いよっし！　救出は成功だ。

起死回生の太刀は見事、脅威を拭い去り彼女を救った。

あわよくばすれ違いざまに彼女を抱えて離脱するつもりだったがそれは望みすぎだったかな。

一度、体勢を整えよう

そう安堵し、音速の世界でほっと溜息をついた。

《――この馬鹿ッ！　安心してないで後の事もしっかり考え……

……ってあぁ！！》

脳内に女性の声がしたと思ったら絶叫で思考を遮られた。

そうだ、そうだ。君は一体誰なんだ？

よもやこの状況で脳内嫁が覚醒して語りかけてきたとかそういう類のものではなかろうな？　質問しかけて今度は肉体的に思考が遮断された。

「ごるぶぁ！！？」

人間、ギャグ漫画でなくても奇怪な声が出せるのが判明。超痛いッス。

忘れてたぜ、今がコンマ一秒以下の引き伸ばされた時間だったのを

惰性で更に回転していた俺はさながら超速回転のフリスビー状態、進路上のビルに衝突して更に上空へと打ち上げられてしまった。

《気を抜くからそうなるのよ。……姿勢制御、覚えてる？》

慰めの言葉一つ無い『彼女』に文句を垂れる。

（今の一撃だって奇跡なのに、いきなり空飛んで制御言われても理解できねぇよ。つか、君は？　脳内嫁ならもっとおしとやかな大和撫子で佐本ニ厘さんボイスで囁いてくれるはずだろ？）

こう、影女的な献身さで毎日料理作ってくれたりするわけよ。

《何、妄想垂れ流してるのよ……。私は『村正』。あんたが持ってる神剣の意思。それ以外の何者でもないわ》

（剣の意思？）

《そう。まぁ、いわゆるナビゲート役だと認識しておきなさい。力の使い方を忘れているなら好都合でしょ》

確かに、今何かしらのアドバイスが無ければ、このまま自由落下に従って堕ちていくだけだろう

人が飛ぶとかファンタジーすぎだね、実際。

冷静になればどうやってここまで飛んできたかさっぱり分からんし、彼女の存在は有り難い。

（なら、レクチャー願おうかな。力の使い方とやらを）

ユーフィーを助けるっていう俺の目的はまだ終わってないからな。

目下の脅威を排除しても彼女をアリアのところまで運ばないと元も子もない。

心の中で頭を下げると彼女は満足げな声で答えてくれる

《任せなさい。精神間での会話は時間が経過しないからみっちりいくわよ。まずはマナの発生条件から……》

説明されるのはマナとやらの基本的な知識から、どういった存在なのかまで遡っての講義。

初心者である俺にも解り易く理解出来るよう配慮してくれているんだろう。一言一句、聞いた事の無い単語の説明までしてくれた。

けっこういい奴っぽいなこの子。

《解った？》

やがて、正常な時間が経過していれば一時間はたっぷりと過ぎた頃、村正はやり切った感たっぷりの声色で締めくくった。

うーん。顔が見えればさぞ良い笑顔なんだろうな。

俺は懇切丁寧に教えてくれた彼女に向かってまたも心の中で大きく頷き、晴れ晴れとした表情で

（さっぱり解らん。）

そのまま頭を下げた。

《なんでよ！？　一から十まで教えてあげたじゃない！》

（俺の頭では一度に2までしか覚えれない！　舐めるな！）

《開き直った！？》

一度聞いて理解できるならテストで毎回１００点取ってるわ。

（第一、頭で十全を理解出来ても、実際に反映できるかは別問題だろ？　もっと手っ取り早くあの子を救う手段は無いのかよ）

悪いが俺は天才くんじゃない。ましてただの庶民だった男だぞ。さっきみたいな偶然をもう一度再現するなんて不可能すぎる。

あのウェスパシアヌスが厄介な行動に出る前にもっと確実に。このチャンスを活かせる方法がほしい。

願うように村正の返事を待った。

《……あるにはあるけど》

あるのか。けど悩むような口調はご都合主義バンザイと素直に喜べるものじゃ無いって事だよな。

《かなり体に負担が掛かるわよ。激痛で全身が張り裂けるほど苦しくなるかもしれない。それでも使用するの？》

今度は窺うような声で。心配してくれるのはありがたいが今は俺の体を考慮してる場合じゃない。

（最優先はユーフィーの救出だ。よく分からんが多少の無茶は我慢してみせる自信がある）

《……ふーん》

（なんだ、急にへんな声出して。おかしな事言ったか？）

むしろ、主人公風のかなり格好いいセリフだったと思うんだが。

《記憶が無くなったせいか、性格も随分丸くなったのね。……以

前の御堂なら、あのウェスパシアヌスとかいうのを先に対処しようとしたはずよ》

（あー、またその話か。この短時間で三人にも言われると流石に耳たこだな。いいからさっさとあの子を助けようぜ。……ここから始まるロマンスがあるかもしれん）

超希望的観測だけどな。そう、冗談交じりに笑い飛ばしたんだが

《――御堂、歯を食いしばりなさい。全力でいくわよ》

有無を言わさない、強い意志が伝わってきた。

ちょっと待て、いきなりかよ！

言葉と同時に世界が等速へと戻り、天空に舞い上げられた体が違和感に包まれていく。

それはすぐに実感となって神経という神経、五感全てを侵食し、荒れ狂う。

「せめてこれからどうするのかだけでも言ってくれぇ！」

割と本気の懇願、けれど彼女は一言だけ告げて行動を開始した。

《――磁気鍍装（ながれ）・正極（まわる）》

さっきのがロケット花火ならこれは弾丸。視認なんて最初っから諦めるしかない音速越えのスピードに叩き込まれた。

……俺、何か気に障るような事言ったか？

――――――――――――――――

（なんだというのだ。今のは……。あれではまるで生まれ変わり、存在の再構成そのものではないか）

驚愕に打ち震えるウェスパシアヌス

自分の後ろで使い魔が切り捨てられたのは感じ取っていたが、それよりも目の前で起こった奇跡の業に心奪われていた。

（永遠神剣。まさかこれほどまでとは……。いやはや、長生きはしてみるものだね）

思わず顎ヒゲを撫で回す。

自分の使い魔は『とある理由で』耐久力や再生能力といった防御面を重視している、ただの一太刀浴びせられたところで死にはすまい。問題なのは彼の変化。

あれはまさに規格外だ。詳細は調べてみなければ解らないが、なんの外科手術も無しに肉体の構造を書き換えるなど常識はずれもいいところ。もし、自分の手中に入ればどれだけでも応用が効くだろう。

（これはぜひともご同行願い、ワタシの研究に貢献してもらいたいなぁ。）

この逸材を命令通り、大導師へ献上するのはあまりに勿体無い。うまく利用出来ればあの『暴君』さえ越える作品（チャイルド）が生み出せるはず。

「アリア、とか言ったかねお嬢さん。紳士としてあるまじき行為だが気が変わった。無理にでも我が手元へ来てもらおうか」

好々爺の表情は消え去り、冷たい瞳で見下ろしながらウェスパシアヌスは指を鳴らした。

「ガルバ！　オトー！　多少の欠損は構わん、彼女達を絡め取れ！」

重要なのは恐らくあの剣。悪いが強引にいかせてもらおう。

再動する肉塊のモアイ。アリアの正面にいたオトーが合図と同時

に前進していく。

だが、この一大事にアリアは悲観めいた顔は浮かべなかった。

むしろ浮かんでいるのは嘲り、嘲笑といった類の笑みだ。

止められた術式を再開し、マナを高めていく。

「……残念、無念、また来週。あんたは一つミスを犯した」

「なに？」

言葉の意味が分からないといった口調でアリアを見下ろす。

「……『彼』への注意を怠った。それが敗因」

「なにを言うのかと思えばそんな事かね。彼はただの一般人。今のような奇跡をそう何度も……ッツ！？」

そこで気付く。

困惑する使い魔の呻きに。

咄嗟に振り返り、ガルバを見れば再生能力が自慢のはずである体が二つに裂けたまま再生していないではないか。

抉り取られたように断面が脈動するだけでぶるぶると振動し続けている。

（ただの剣撃ではなかったというのか？　いや、それよりも青い

少女はどこに。青年は……）

彼が起死回生の一撃を放った後、勢いを殺しきれずに宙を舞っていたのは把握していた。

だが、それを立て直すにはまだ時間がかかるはず。あの速度、あの負傷程度ですぐさま反転するなどありえないからだ。

目の前の異変に一抹の脅威を覚え、アリアに質問しようとしたところで再度、ウェスパシアヌスの表情が驚愕に染まった。

ビルの屋上にはいなかったはずの青髪の少女と全身から青白い燐光を発する青年が膝で体を支えながらもアリアの側に寄り添っていたからだ。

――――――――――――――――

人間やれば出来る。なんて謳い文句は嘘だと思う。無理なもんは

無理に決まってる。

競争世界で生きていくには諦めは肝心だし、本当に可能だってんなら、みんながみんな夢を叶えてるはずだろ。

……え？　なぜこんな時に人生論を繰り広げているんだって？

いやいや、わかるでしょ、話の流れ的にさ。

なぜか怒った様子の村正さんがどんな行動に出たかなんて言うまでもなかろう。

これはあれさ、いわゆる防衛本能における精神の予防というか、ただの言い訳というか。

……ぶっちゃけ頼んで後悔してるんだ。俺はさ。

（ずえええええ！！？）

これ、ちなみの心の声な。実際は呼吸すら出来ないし。

フェードアウトしていく視界。

ドップラー効果も実感できないほどに加速していく世界。

ユーフィーを回収してもう一度あの動きに耐えれたのは、やれば出来るの範疇に収まってない思う。

文句一つ言えないこの状況で何とかアリアのいるビルに着地する。

「おおぉっ！？」

慣性の法則が物凄い。片手でユーフィーを抱き抱えてるのもあるが足で踏ん張る程度じゃまるで減速しやがらない。

そもそも足の骨折れてそうだし、これ以上の負担はまずいな。

ここは説明を怠った彼女への仕打ちも込めて荒業を使わせてもらおう。

「せーの！！　っと！！」

刀を逆さまにビルへ突き立てて急ブレーキ。がりがりと屋上コンクリートを砕きながら速度を落とす。

《ちょっ！？　いた、いたたたたたっ！！　折れる、折れるぅ！！》

まあ痛いだろうな。だが俺だってハンパなく痛いんだぞ

磁気鍍装・正極

村正の特殊能力、『磁力制御』における反発の力で打ち出された俺は臓物全てを吐きそうになりながらもユーフィーを救った。

あの時はすれ違い様に掠め取ったから良かったものの今はここで停止しないとまずいからな。

意趣返しがてら多少の無茶は大目に見てもらおうか。

《くっ、もうっ！　なんでそういう扱いの荒さだけは変わってないのよ！　もっと優しく接しなさい！》

「っと、おう！　いきなり戦闘に巻き込まれた一般市民がそこまで気ぃ使えるか！」

ちょうどアリアの隣で止まる事のできた俺は村正に食ってかかる。

「……仲がよろしい事で」

「よくねぇよ。つーか準備はいいのか？」

こくりと頷くアリア。

「……あと、一分でやる」

やれやれ、この慌しい騒動も一応収束するのかと、一息つこうとした所で今度はあの紳士が苦虫を潰したみたいな顔で喋りかけてきた。

「どういう事かね、青年。ただの人間にしては無茶を省みなかったようだが何が君をそこまで駆り立てたのか、ご教授戴けないかな？」

「あー。強いて言うなら……カッとなってやった。今は反省している。……みたいな？」

「……いや、意味分かんないから」

ずびし、と突っ込まれた。万能だなこの子。

「真面目に答える気は無い。という解釈で良いのかな」

針みたいに目を細めるウェスパシアヌスはさっきまでの余裕の面構えを捨ててこちらを睨んできている。

「無我夢中の行動だからな、質問されてもうまく回答できない。ってのが本音だな。まあ元から襲ってきたあんたと真面目に話したいとも思わんからこんな答えでいいだろ？」

言いながらユーフィーを足元に降ろし、村正を再度、肩越しに構える。

《御堂？　何をするつもりなの？》

（残り一分、あのおっさんがみすみす見逃してくれると思うか？先手必勝、さっきの講義にあった技を使わせてもらうぜ）

磁気鍍装、元が上位永遠神剣だったという村正だけが使える特殊能力。その本来にして最大の使用方法で最後のスキを作らなければまた術中に嵌ってしまうやもしれない。

無理は百も承知。というかここまで来たら五十歩百歩じゃね？

《そんなわけあるはずないでしょ！　ったく、死んでもしらないわよ、馬鹿》

諦めたような口振りでも力は貸してくれるらしい。いやー、持つべきは頼りになるパートナーだね。

「じゃ、そういう事でおっさん。ウェスパシアヌスかウエハースか忘れたけど随分世話してくれたな、もうそろそろここでお開きとしようか」

《――磁気鍍装》

鼓膜に直接干渉してくるような鈍い振動音が自分を中心に広がっていく。

バチバチと周囲で稲妻が弾け、その唸り全てが担いだ刀『村正』へ収束、金の刀身が色濃く染まって輝きを増す。

ある種、幻想的な光景にも見えるが一皮剥けば死の塊でしかない刃を俺は背負っている。

「行くぜ、おっさん」

なぜか恐れはない。麻痺したかのように恐怖は消え去り、手段だけが頭に浮かぶ。

「……良かろう。年長者として君の覚悟をあえて全身で受け止めようじゃないか。ささっ、存分に放つがいいさ」

ここに来ておどけた仕草を取るウェスパシアヌス。

疑問の一つでも挟みたいが充電(チャージ)はもはや止められる段階をとっくに越え、今か今かとばかりに激しくマナを噴出している

「――磁気鍍装（エンチャント）・蒐窮（エンディング）」

高磁力を一点に集中し極大の反発力を生み出す蒐窮磁装（おわりのながれ）。

この攻撃ならば相手が誰であろうと逃れる術はない。

背に這うように担がれた刀は極光に包まれ、暴力的な破壊だけを生み出す。

《この出力……！？　御堂、貴方どれだけの力で撃ち出すつもり！？》

村正の問いに答えず、両目を見開いて怒号と共に太刀を振り落とした。

「電磁撃刀（レールガン）――――――――――――“威（オドシ）”！！！」

一閃。瀑布のように襲い掛かるのは磁界の津波。

視界全てを埋め尽くすほどの広範囲攻撃は金色の濁流となって使い魔ごとウェスパシアヌスを飲み込んでいく。

「……すご」

崩壊するガレキの音に混じって聞こえてくる感嘆の声はアリアだろうか。

激しい眩暈と呼吸困難に陥った俺には良く聞き取れなかった。

崩れ落ちるように膝を着くがどうにも心臓の動悸が収まらない。なんかまずったか？

《……どう。……御堂！　返事をしなさい！》

（うるさいな……少しは休ませろよな）

《何を暢気な事言ってるの、さっさとマナを補給しなさい！》

あ？

《こっちの予測、三倍以上の威力で放つなんて想定外にもほどがあるわ！　このままじゃマナが枯渇して死ぬわよ！》

そういや、前方がやけに見晴らしが良いなと思ったら、どうもビルを二、三棟叩き潰したみたいだな。うん、やりすぎた。

……凄まじいな、おい。

（でもどうやって補給するんだ？　この世界じゃ空気中のマナが薄いんだろ）

《……ちょうどいいのが側にいるじゃない。》

言われて自然に視線が向いたのは未だ倒れ伏せるユーフィーの姿。

こいつ、怪我人にこれ以上の無茶をさせる気なのか……

《このちびっ子はエターナル。今の私程度が吸い上げても命に別状無いマナ総量よ。第一、この場で御堂が死んで困るのはこの子達でしょ、だったら礼は言われど文句はないはずよ》

いや、そう言われてもな。本人の了解無しじゃ…

躊躇していると不意にぎゅっと腕が掴まれた。

「ユーフィー？」

「マナ……、使い過ぎたんですよね。だったら私の力使ってください」

「けど……」

「……もらっておけ、でないと本当に死ぬよ」

見ればアリアからあの白い光が溢れてきている。

しかも裏技のせいなのか、一本だけだった短剣が彼女の背中から生えるように次々と突き出し、天使の羽のように揺らめく。

それに比例するかのように白い光は依然に増して神々しく瞬いて今にも何かが発動しそうだった。

「時間樹を移動する前に……早く」

「くっ、やりすぎるなよ村正」

《……善処するわ》

「っつ、おい……っ！」

不安を煽る回答に異議を告げる直前、ユーフィーから力が流れ込んでくるのが感じられた。

「……閂（かんぬき）。……『叡象（えいしょう）』、今だけ力を貸して」

同時に光の洪水が三人を範囲内に収め、視界が真っ白に染め上げる。

微細な浮遊感。

無重力めいたこの開放感はさっきの移動では感じられなかったマナの流れなんだろうか。

村正を通じて流れてくる暖かい力を噛み締めながら、俺達は休む間も無く『ミッドチルダ』と呼ばれる世界へと足を運ぶ事になった。

その数分後。

鞘吾が吹き飛ばしたビルの残骸で蠢く人型の肉塊があった。

電磁撃刀の直撃を喰らい、黒炭のようにボロボロになっているにも関わらず、内側からは瑞々しい肌色が顔を覗く。

それはあたかも昆虫の繭のようにひび割れ、中から傷一つ無い人物が現れた。

「……ふーむ。よもやワタシを一度とはいえ殺してしまうなんてねぇ、彼もまた逸材という事なのかな？」

単に武器の性能が良いだけではこの結果とはなるまい。

最大限に警戒し、最良の手段を用いて攻撃を加えた。この判断は才能の一つとして特記しておくべき事項だろう。

ウェスパシアヌスはまたも愉快そうに顎ヒゲを撫でた。

「お手並み拝見はここまでか。いやいや、実に惜しい、惜しいねぇ、真に残念だよ。かっかっか」

取り逃がした事を悔いる様子も無く豪快に笑い飛ばす。双眸に爛々と悪意を灯しながら。

「そういえば彼らに伝えておくべきメッセージを忘れていたな。次の機会にはきちんと説明しておかないといけないねぇ」

仰ぐように今はもう姿も形もない鞘吾達に向かって告げる。

「……私の使い魔は二体だけ。ではないのだよ、諸君」

悪魔の笑みが、そこにあった。

第四話　場面†転換　燃え盛る空港と彼女達との出会い（前書き）

ようやくリリカルなのは編突入……まではもう一歩。

幼いあの子と三人娘、そしてまさかのキャラクターが登場します。

第四話　場面†転換　燃え盛る空港と彼女達との出会い

眩い白光に視界を覆われ、反射的に瞼をきつく閉じてしまう。

自室からの時とは違い、身体の中身がシェイカーのように掻き回される不快感が持ち上がってくるが、それをぐっと我慢してこれから起こるであろう騒動に思いを馳せる。

なし崩し的に異世界？に連れて来られた上に戦いにまで巻き込まれてしまった俺の人生。

永遠神剣。俺の過去。分からない事は多々あるが、なぜかユーフィーと呼ばれた少女を助けてやりたいという思いが確実に胸の中にあるのは確かだ。

それはいったいどこから来る感情なのか、答えはこれから判明していくのだろう。

収まっていく光の収束に身を委ね、目下の説明を求めるべく口を開いた。

「アリア、とか言ったな。もうそろそろ説明してくれよ。俺がどうしてこんな目に合っているのか、なぜ俺なのか。危機を脱したっていうんならじっくりと話を聞かせてくれよ」

「えっ？」

「……えっ？」

不思議と重なった俺ともう一人の声。

この声のトーンは始めて聞くな。いや、問題はそこじゃない。もっと差し詰まった恐怖が迫っている。

眉をしかめて思い返せば、時間樹の移動とかすごく聞きなれないが凄そうな単語があったよな。

なにか決定的な間違いを起こしてしまったような、またも何かに巻き込まれたような予感に促され、瞑られた瞳を恐る恐る開けてみると、そこには。

「……もっそい、燃えとるがな」

思わず訛った。

目の前に広がるのは一面火の海。

赤やオレンジの炎が煌々と揺らめき瓦礫と化した建造物を覆い尽くす。肌にぴりぴりと感じる熱波は所狭しと暴れまわって辺りに激しい対流を巻き起こしている。

やだ、なに怖い。どこの桜坂消防隊だよ。

外気温、数割増しの熱波に身を晒していると自然と身体が汗ばんでいく。

ようやく息がつけると思ったら更なる災難に見舞われてしまうという怪異。えっ、何、プロローグまだ終わってないのとメタ発言が自然と浮かんだ。

「どうしてこうなった……」

「……あの」

悲観に暮れて棒立ちしていると右手に違和感を感じて目の前まで上げてみた。

くしゃくしゃになって握られていたのは一枚のメモ。いつの間に持っていたんだろう。

やたらファンシー調の便箋だから俺の私物ではないのは決定的だ。

まさかと思い、一抹の期待を胸にしながら慎重に指を解いていくとそこにはたった一言。

やっちゃったＺＥ☆

。

「やっちゃったＺＥ！？　なんで明るく釈明してしちゃってるんだＺＥ！？」

思わず移った。

「あ、あの……」

恐らくは何かしらのトラブルが発生したものと思われるがなぜに俺一人だけなの？

裏を見ても、透かして見てもその一言だけで完結している。

いじめか？　会って間もないのに仲間はずれにされたの？　馬鹿なの？　死ぬの？

アリアとかいう少女は天然でそういう事しそうな気がする。

メモを挟む時間があるならもっと具体的な内容を書いておいてくれよ……。

「あ、あの！」

行き場の無い怒りに身を苛まれ、俺はそれをぶつけるように刀を振り被った。

《――えっ？》

ガスッ、ガスッ、ガスッ、ガスッ、ガスッ、ガスッ、ガスッ、ガスッ、ガスッ、ガスッ、ガスッ、ガスッ、ピシッ！

《ちょっと！？　痛っ、痛っ、痛いってば！　あっ！　なんか嫌な音したーーー！！》

手近な残骸に向かって村正を鞘ごと連続で叩く。

おのれ、ディケイ……じゃなかった、おのれアリアめ、俺にチュートリアル無しでこの先、生きていけというのか。

苛立ったまま村正を酷使していると不意に左袖を引っ張られた。

「えと……救助に来てくれた人、ですか？」

「……はい？」

この間、なんと5秒

シャリバンならば余裕で千回以上の変身が可能な間が空いた。

突然な内容に？マークが頭上に点滅。

視線を少しだけ下に下げれば、そこには見たことも無い少女。深い青髪をショートカットで整え、大きな瞳を潤ませながらぎゅっと服の裾を握っている。

「お姉ちゃんと逸れてからずっと一人で、何処行っても誰も居なくて。……歩いても歩いても、出口が見つからなかったの。それで私、ずっと寂しくて……う、うぇぇ……」

泣いた！？　ぼろぼろと涙を零しながら顔を歪めてしまう。

慰めたいのは山々だが、いきなり少女に泣き付かれてしまうとか世間様の前だと捕まってしまいそうだ。

ここがどこだか分からない現状に配慮し、そっと引き剥がそうとするが

ガッ！

「力強っ！？　万力か、この子は！」

肉のモアイに吹き飛ばされたり、ビルに突っ込んだりで破れ被れになっているシャツを死んでも離さないといった雰囲気で締め付けてくる。

押せども、引けどもビクともしない。いや、まあ女の子相手に全力は出してないから仕方ない部分もあるわけだが。

しょうがなくなすがままに泣かせておいて落ち着くのを待ってみる。

強制イベントってこんな感じなんだろうか？　回避手段がごっそり抜け落ちてる気がするぜ。

開き直って小っこい頭を撫でながら、しばし思巡に暮れる。

改めて考えてみれば、時も場所も場合も分からない状況に叩き込まれて頼られても困るというのが本音。助けてももらいたいのはこっちの方だと声を大にして物申したい。

ついさっきまで瀕死の重傷を負ってなお、今度は周りは燃え盛る炎に包まれるという怒涛の展開に正直パニックにもならず、平静な精神を保てている自分を褒めてやりたい気分だ。

唯一、事情を知ってそうなあの二人はここまで影も形も現れていない今、俺はどんな判断を下せばいいのか？

あえて無視していた非日常の塊。喋る刀であり、俺の過去を知っ

ているらしい神剣『村正』の話を聞いてみる事にした。

『――おい、さっきから耳の隅でめそめそ泣き声を上げてた刀ガール。分かっている事だけでいいから現状の説明をしてくれないか？』

念じて声を送ってみるが返事は来ない。さめざめと「欠けた」だの「曲がった」だの恨み辛みが篭った呟きが響くだけだ。

以外にデリケートな奴だな。俺の知ってるエロ魔剣はもっと根性があった気がするが。

《……絶対、今ので鞘にひびが入ったわよね。うぅ、何でこう丁寧に扱えないのかしら。そこだけ変わらないとか理不尽にも程があるわ》

這うような怨嗟。その件に関してはどうも身体が勝手に動いておざなりな対応をしてしまうので申し開きようが無い。

彼女の言い分はもっともなので機嫌を損ねないよう、対応の度合いを決めておく。

きっと、この刀は潜在的なMの気を発しているんだな。うん。

《そんなわけないでしょ！　馬鹿っ！！》

心外だとばかりに関西人並みの反応の良さをもって突っ込みが返ってきた。何か予想通りな反応で安心したぜ。

『気を取り直したところで説明してもらうぜ。俺の事、この状況。

知ってるところだけでいいから一切合切話してもらおうか』

ファンタジーで非現実的な騒動に非応無く身を投じたわけだが、流されるままってのは性に合わない。

テンプレ通り与えられた状況に従ってイベントをこなしていくよりも出来れば自分の手でなんとかしていきたいと思いが熱を持ったかのように強く潜んでいる。

眼前に広がるのは狂ったように燃え広がる炎と原型が解らないほど砕け散った瓦礫の山。

その光景をどこか懐かしく感じながら俺は村正の言葉に聞き入った。

――――――――――――――――――――

『なのは、聞こえる？』

『フェイトちゃん？　どうしたの、現場でトラブルが発生したの？』

場所は少しだけ変わって同時刻、火災現場であるミッドチルダ空港の上空で栗毛の髪を揺らす少女が念話に応じる。

『今、空港内部で要救助者を回収してる最中なんだけど、事前にもらった情報にいない子が見つかって少し判断を仰ぎたいんだ』

ほんの少しだけ思い悩むかのような間を持ってフェイトと呼ばれた稀代の魔法使い、フェイト・Ｔ・ハラオウンが答えた。

『救助が難しいの？　それだったら私より指揮を執ってるハヤテちゃんか担当の人に掛け合ったほうがいいと思うんだけど……』

『それは理解してる。でも、ちょっとだけ厄介な状態で手を離すのが危険かも知れない』

『危険？』

『そう、ケタ違いの……うん、本当にケタが一つ違う位強力な魔力を持ったドラゴンみたいなのが二頭、気を失った子の周りをうろついて近づけないんだ』

『えっ、でもこっちに魔力反応は何も出てないよ？』

『それがどうも私達とは異なる波長の魔力みたいなんだ。よっぽど近づかないと計器は反応しないみたい』

彼女の説明によれば青と白色に輝くドラゴンはこちらに危害を加える様子もなく倒れる少女の周りで警戒し続けている様子だが、万が一暴れ出せば一般局員や市民はひとたまりも無い。いまだ救助活動を完遂していない状況でこの場を離れるべきか相談したかったらしい。

『ハヤテに連絡したら、せっかく指揮者としてアピール出来る機会を振ってでも現場に出てくると思うの。だから後続の引継ぎが来るまで出来る事なら私達だけで対処したいと思う』

ただでさえ、八神ハヤテという女性は過去の事件で要らぬ誤解を受けやすく、平和のため尽力しようとしている行動に支障が出る場合が多かった。

典型的なお役所仕事が横行する局内で自らの部隊を持たない彼女は自由に行動が出来ず、歯噛みする日々を送っているのをフェイトは知っていた。

助けを乞うのはもっと後からでも大丈夫と判断したい。

『この一大事にこんな打算的な考えを持つのは悪い事だと思う。けど、ハヤテにはもっと偉くなってやりたい事をさせてあげたいんだ。だから、なのは。そっちの要救助者一名を助け出したらこっちに力を貸してくれるとありがたいな』

秘匿回線染みた念話の中でフェイトが頭を下げているのが栗毛の少女、高町なのはには伝わってきた。

確かに共通の親友であるハヤテの苦悩は自分も理解している。

幸い、休日の緊急出動という事もあって自分の任務は一つ、中央部に取り残された少女の救助を優先して対処するよう指示が出ている。難度が高いとはいえ時間的猶予は十二分にある。

急ぎ救助を成功させ、折り返し彼女と警戒の任を変わる事にしよう。

『了解だよ、フェイトちゃん。すぐに終わらせてそっちに向かうからね』

『ありがとう、なのは！』

『にゃはは、私だってハヤテちゃんにはもっと活躍してもらいたいもん。任せておいてよ』

とん、と少しだけ慎ましい胸を叩いてなのはは現場へと向かうべく飛行速度を上げ、地上に向かって飛び込んでいく。

防壁に守られているとはいえ耳に入る風切り音は凄まじく甲高い。弾丸めいた姿となって空港内部に侵入した。

――謎のドラゴンは確かに気になるけど、あと少しすれば引継ぎの指揮官も到着するだろうし今は一刻も早く任務を完遂しフェイトちゃんと合流しよう。きっと後でハヤテちゃんには怒られちゃうけどこれぐらいの無茶は仕方ないよね。

心の中で自嘲するような笑みを浮かべて落下していく。

その先に、予想すら出来ない災厄が待ち受けているにも関わらずに……。

『つまり、こういう事か？』

村正にこれまでの経過を訪ねていた俺は重複するようだが簡潔に内容を纏めてみた。

1．俺は何者なのか？

俺はかつてエターナルと呼ばれた人外の存在で強力な永遠神剣を自分勝手に振るい、非道、残虐の限りを繰り返していた。だがある日、何者かによって討伐された事により記憶と力を失い、一般市民として生活していた。

当人にそんな自覚は今のところナッシング。

2．この状況はなぜ起こったのか？

今、力の源となった剣は分割され、様々な世界に四散してしまっているがユーフィーやアリアはとある組織の任務でそれの回収を命じられている。俺は元持ち主という事で異世界に引っ張り出されたようだ。

いい迷惑だ。

3．村正ってそもそも何なの？

正式名称、永遠神剣第六位『村正』

かつての神剣『森羅』の破片であり、明確な意思を持つ刀。彼女自身、本来の姿に戻るのを切望し、一時的にとはいえアリア達に所持を許して俺の手元までやって来た。

たぶんツンデレ。

4．現在の状況は？

世界間移動時に問題が発生し、現在彼女達とは音信普通状態の離れ離れ。詳しい内容は村正も理解出来ていないようだが、どうもアリアの力が強すぎたらしく、目的地こそミッドチルダとかいう世界に辿り着けたが聞いていた場所とは異なるようだ。

村正曰く、同等の存在である神剣の気配を感じない、もしかしたら時間軸がずれて、過去か未来に移動してしまったかも知れないと

の事。

……何でも有りだな、永遠神剣。

ちなみにあれだけ大怪我を負ったにも関わらず、現在、俺の身体は鈍い痛みが走るだけにまで回復している。どうやら村正の奴がユーフィーのマナを吸収しまくって過度の回復を促進したらしい。

5．これからどうすんべ？

俺が聞きたい。

「ともあれ、今はこの場からの脱出が最優先だよな。このままじゃ多分焼け死ぬし」

ここがどこであれ長居して良い場所で無い事だけは確実だ。

小さな少女の頭を撫でていたのを止めて顔に当てて泣いていた彼女の手を柔らかく握る。

「とっととこの灼熱地獄から出ようか、お嬢ちゃん。身を守ってやる自信は無いがとりあえず一緒にいたほうが生存率はあがると思うぞ」

袖触れ合うのも多少の縁。見殺しにするのは流石に気が引けるからな。

本当に信用できる相手なのか、目踏みするようにじっとこちらを見つめる少女の返答を待つ。

「……うん」

割と長い時間悩んだ末に少女は頷いた。

落ち着いて考えてみれば今の俺は全身よれよれで刀持った危険人物だよな。うむ、なかなか気の据わったお子さんだ。

「ちなみに俺の名前は比良坂　鞘吾、１７歳な。人生という迷路で絶賛遭難中だが幼女趣味はないから安心しな」

「あっ、私はスバル・ナカジマです。１１歳。……ようじょしゅみって何？」

「解らんならそれでいい。んじゃ行くとしますか」

余計な一言だったな。泣き腫らした顔で首を傾げられるが誤魔化すように先導して道無き道を進んでいく。

《親切だこと。っていうか以外に若いのね、少し意外だけど過去の記憶のせいで精神が成熟してるのかしら？》

「そこらへんは何とも言えんな。最近の奴らはわりとこんな性格だと思うが……」

「？」

「ああ、いや何でも無い。先に進もうぜ」

つい呟きが口に出てしまったので更に誤魔化しておく。

――そして１０分後。

「盛大に迷った」

「ふぇ……」

《……方向音痴も変わらないのね》

迷わないように手を繋いだ彼女から泣き声が漏れた。

互いの身の上を話しながら行ける道だけ選んで進んでいけば、建物の中央にありそうなエントランスホールに出てしまった。

絶対付近に出口無いよな。

燃える炎からは距離が取れたのは幸いだが、辺り一面火の海であるのは変わらない。間違いなくより窮地へと立たされてしまった。

でっかい天使像がこちらを見下ろし、迷子乙、と嘲笑っているようにも見えてくる。

被害妄想？　いえいえ、これでも結構テンパってるんですよこれが。

「どうしたもんかな……」

始めはアーカムシティで見せたように飛んでサクサク進もうと思ったが村正の話では飛行機と同じく直線しか航行出来ず、小回りが効かないらしい。

こんな入り組んだ構造だとすぐぶつかって終わるな。ミニ四駆のように己を犠牲にして飛ぶのは御免被りたいぜ。助けて、土屋博士！

「うぅ……お姉ちゃん、お父さん……」

いかん。スバル嬢がお泣きになる直前だ。

繋いだ手から小刻みに震える振動としゃくりあげる声が聞こえてきた。

余計なトラブルを避ける意味でもどうにかして泣き止まそうと思い、咄嗟に言い包めるよう言葉を放つ。

「どうしてそこで諦めるんだ。出来る、出来る！　頑張れば何だって出来る！　諦めんなよ！！　お米食べろ！」

「え、えぇ……」

スバルどん引き。

《……何がやりたいのよ、貴方は》

地形効果を受けても炎の妖精は子守が苦手なようだ。

仕方ないので握り合った手を出来るだけ優しく包み込んで安心させる事にした。男は黙して語るというし今はこれで勘弁してください。

俯くスバルを見ながら村正に話しかける。

『村正。電磁撃刀で天井ぶち抜いて、空に出るのは可能か？』

それなら直線飛行でもここから脱出できるんじゃなかろうか。

《馬鹿な事を……。建物の中で高火力技なんか出したら瓦礫に押し潰されるに決まってるでしょ。少しは考えなさい》

『それもそうだな。上に向かって撃つにしても二次災害が起こらないとは言い切れないしな。ふー、危うく危険人物の仲間入りするところだったぜ』

《差し迫って問題は無さそうだから地道に出口を探した方が無難よ、そんな無茶誰だってしない……》

その瞬間。村正が呆れた声で言葉を返した途端に鼓膜をつんざくような爆音と共に突風が吹き荒れ、側にあった天使像を吹き飛ばして何者が突っ込んできた。

「な、なんだ！？」

おかしなフラグでも踏んでしまったか！

轟音のせいで怯えてしまったスバルが俺のズボンを握って背後に

回る。ばらばらと落ちてくる残骸に注意しながら爆散した巨像付近に目をやるとそこには白い衣装に金色に煌く杖のようなものを持った女性が身構えていた。

「くっ、こんな相手がいるなんて予想外だったよ……。君、大丈夫？」

「あ、あぁ、俺もスバルも怪我一つないけど……」

「なら良かった。報告だと女の子一人だけだったけどまだ他にも居たんですね。貴方達以外に逃げ遅れている人はいますか？」

「いない、と思う。さっきこの子と合流してから人っ子一人会って無いからな」

こちらを背を向けて問いかける少女はど派手な登場のわりには柔らかな含みを持っている。

「私は時空管理局、航空戦技教導隊所属の高町なのはです。要救助者である貴方達を救出に来ました」

おお、渡りに船とはこの事か。

「……ですが、少しだけ下がっていてください。トラブルを片付けてからここを脱出しますから」

構えた杖を水平に持ち直すと、ガシャコン！　という無骨な作動音が広い空間に木霊し、薬莢っぽいのが僅かな煙と共に飛んできた。

あれはいったい？　見た目に反して銃か何かだろうか。メタリッ

クな光沢を放つ姿はとてもじゃないが堅気の持ち物と思えない。

救助はありがたいがどうにもきな臭い雰囲気が漂ってくるな。

像が崩壊した影響でもうもうと煙が立ち込めている中で、何か巨大な物体のシルエットが炎に照らされて陰影を濃くしている。

あれは……ムカデ？　でかっ！　つか気持ち悪っ！？

時間経過と共に姿が露になったそれは今まで目にした事のある生き物と様々な部分で異なっていた。

ムカデの名を表すが如く不快なまでに蠢く多足を戦慄かせ、生理的不快感を伴いキチキチと不気味な音を鳴らしている。銀色の甲冑で覆われたような節足動物が触覚と鎌首をもたげて威嚇動作を繰り返しているではないか。

全長は目測で2メートルから3メートルぐらい。化け物じみた大きさの機械ムカデは器用に残骸を避けながらにじり寄ってくる。

高町と名乗った女性はそいつに用があるのだろう、杖の先を突きつけて警戒しながら数歩、後退って距離を測っているようだ。

よくもまあ、これだけ騒動が引き起こるなと他人ぶって考えてみたがどうも様子がおかしい。

ムカデは一定の位置まで進むとそれ以上動かずにせわしなく触覚を揺り動かしている。

《あれは――守護神獣！？　どうしてここに！》

思い当たる節でもあるのか、突如として村正が叫んだ。

それに応えたのかは分からないが、機械のムカデは触覚の動きを止めて警戒する魔法少女を尻目にゆっくりと輝く双眸をこちらに向けた。

《標的、発見。――遠隔の仕手よ。予定通り仕留めても構わぬか》

《――――――》

相互間にしか聞こえない波長で鋼鉄のムカデが交信を受け取った。

《――承知仕った。見敵必殺。怨敵粉砕。与えられし当方の任、見事成し得てみせようぞ》

身体の節を奇怪に動かしながらムカデがじんわりと発光し、こちらを見据えて牙のように鋭い顎を鳴らした。

第四話　場面†転換　燃え盛る空港と彼女達との出会い（後書き）

満を持して？真改さんが守護神獣として登場。（装甲悪鬼村正より）

詳細は次話にしてもこの小説の敵が垣間見える戦いになりようです。

この後、主人公とユーフィーはあの組織に拾われる事になったり。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8099l/

魔法少女リリカルなのは　Ｎｉｔｒｏ＋　妄想してみた。

2010年10月8日11時16分発行